Simone Ricca. 2007. *Reinventing Jerusalem: Israel's Reconstruction of the Jewish Quarter After 1967.* I. B. Tauris. xiii+258pp.

エルサレムは、ユダヤ教・キリスト教・イスラームの 3 つの一神教の聖地であり、古代から幾度となく征服され、支配者が入れ替わった歴史を持つ。現代史においてエルサレム問題は、パレスチナ問題の最も重要で最も解決の難しい問題のひとつである。1967 年にイスラエルは、当時ヨルダン支配下にあった東エルサレムを拡大・併合し、東西統一エルサレムをイスラエルの首都と宣言した。本書は、現在「ユダヤ地区」と呼ばれるエルサレム旧市街の地区において、イスラエルが 1967 年以降に行ってきた「ユダヤ化」政策を扱っている。

近代以降、ヨーロッパからのキリスト教徒の巡礼の増加と「東方問題」を期に、ロシアやヨーロッパ諸国によるエルサレムへの干渉が次第に強まっていった。ロシアやヨーロッパ諸国は、キリスト教各宗派の信者の保護を名目にパレスチナへの干渉を増大させ、エルサレムに領事館も置いた。加えて、パレスチナへのユダヤ人移民が増大し、エルサレムにおいてもユダヤ人のプレゼンスが拡大すると、ユダヤ人コミュニティとパレスチナ人コミュニティとの摩擦が増大した。1947 年 11 月の国連パレスチナ分割決議（国連総会決議 181 号）では、ベツレヘムを含むエルサレム地域を国際管理下に置き、英国委任統治領パレスチナをパレスチナ国家とユダヤ国家へ分割することが決定された。しかしながら、1948 年の第一次中東戦争でエルサレムは東西に分割され、旧市街を含む東エルサレムはヨルダン支配下に、西エルサレムはイスラエル支配下に置かれることとなった。1948 年のイスラエル建国に伴う戦争をイスラエル側は「独立戦争」と呼び、イスラエル建国とそれに伴う多数の難民発生をパレスチナ側は「ナクバ」（大災害）と呼ぶ。1967 年 6 月、第三次中東戦争（パレスチナ側は「6 月戦争」、イスラエル側は「6 日戦争」と呼ぶ）でイスラエルは、ヨルダン川西岸地区、ガザ地区、シナイ半島、ゴラン高原を占領した。東エルサレムは拡大・併合され、イスラエルは、東西統一エルサレムをイスラエルの永久の首都として宣言するとともに、東エルサレムで様々な占領政策を行ってきた。

イスラエルは 1967 年 6 月の東エルサレム占領直後に、旧市街のマグリブ地区を破壊し、現在のユダヤ地区にあったパレスチナ人所有の建物を接収した。マグリブ地区は、嘆きの壁／ブラークの壁の西側に位置していた地区で、マグリブ（モロッコやチュニジアなどの北アフリカ）からパレスチナに移り住んだアラブとその子孫が数多く居住していた。以後、イスラエルは、これらの破壊・接収した土地に、「ユダヤ地区の復元（restoration）」というスローガンのもとに新しいユダヤ地区を建設していった。実は、1948 年以前の旧市街には、ユダヤ人だけが住む排他的なユダヤ地区というものは存在せず、多くの建物の所有権はアラブのムスリムやキリスト教徒に属し、居住者もモザイク状に混在していた。このことは多くの研究者が既に指摘している（例えば、［Dumper 2002; PASSIA 2002］）。

1967 年 6 月以降のイスラエルによる東エルサレム占領に関する研究には、大きく 2 つの流れがある。ひとつは、イスラエルによる人口や土地のコントロールに焦点を当てたものである。例えば、［Dumper 1997］は 1967 年以降の東エルサレムの都市構造（urban fabric）を総括的に論じているが、「より少ないパレスチナ人人口とより多くの土地」をスローガンとするイスラエルによる人口と土地のコントロールのための諸政策という視点で議論が行われている。もうひとつは、「町の性格」に焦点を当てたものであり、いかにエルサレムの町を「ユダヤ的」に見せるかという視点からユダヤ化

が議論される。例えば、[Abu El-Haj 2001]はイスラエルの考古学の政治性を論じているが、その中で、イスラエルの考古学は古代イスラエルのユダヤの遺産を発掘することを使命とした政治性を帯びた学問であり、旧市街における考古学の成果がイスラエルによるエルサレム占領の正当化に寄与してきたことを指摘している。どちらの流れにも共通することは、イスラエルのエルサレム占領政策が目指してきたことは、エルサレムのユダヤ化、エルサレムにおけるイスラエルの主権の確立、その国際社会による承認ということを前提にしていることである。本書もこれを前提にしながら、２つの研究の流れを統合するような議論を展開している。すなわち、イスラエルによるエルサレム支配の正統性の獲得には、人口や土地の支配をユダヤ人に有利にするという要素と「ユダヤ的」な町に見せるという要素の両方が必要不可欠であり、1967 年以降の旧市街ユダヤ地区の建設において、その２つの要素がいかに実現されてきたかが論じられている。

＊

本書の著者であるシモーヌ・リッカは、中東におけるユネスコの世界遺産保護のプロジェクトに関わった経歴を持つ建築家である。著者は、エルサレム旧市街にある現在のユダヤ地区の人工性に注目し、この人工的なユダヤ地区が、エルサレムの長い歴史と発展にもたらした「暴力的な破断」を象徴していると考え、本書の研究を行うに至った。「人工的」とは、ある考え方やデザインに沿って、芸術や技術を用いて「造られた」ということである。本書は、序章と結論を含む全８章で構成される。以下、その内容を概観したい。

序章では、本書の目的、構成、エルサレム問題と建築学の専門用語の説明、人口と建築の視点から見たエルサレムのユダヤ人コミュニティの歴史の簡潔なまとめが書かれている。本書の目的は、1967 年６月のイスラエルによる東エルサレム占領以降のエルサレム旧市街におけるユダヤ地区の建設に焦点を当て、シオニストの歴史解釈が都市景観に与えるインパクトという観点から、遺産、ナショナル・アイデンティティ、旧市街につくられた都市構造の相互関係を示すことである。

著者によれば、1967 年から 1980 年代半ばまでに行われた旧市街ユダヤ地区の建設は、「復元」（restoration）として描かれることが多いが（例えば、[Armstrong 1996]）、建築学の定義にしたがえば、ユダヤ地区は「復元」（restoration：対象物の本来の概念を復活させること）ではなく、明らかに「再構築」（reconstruction：歴史的な場所に、近代的な生活のニーズやスタンダードをよりよく満たすようなまったく新しい建築物を建てること）であった。

第１章「プランニング、ナショナリズム、遺産とユダヤ地区の再構築」では、旧市街のユダヤ地区再構築を可能にした文化的背景を提示し、イスラエルの都市一般およびエルサレムで採用された都市計画のシオニスト的アプローチを描いている。本章で著者は、中世以降のエルサレム巡礼を行ったユダヤ教徒の日記やエルサレムの歴史について書かれた本をもとに、「嘆きの壁」のシンボル性の歴史的変遷を明らかにしている。著者によれば、15 世紀まで、ユダヤ教徒の巡礼者の日記に壁への言及は見られないが、16 世紀初め以降、「嘆きの壁」は神殿と再び関係付けられるようになっていった。神殿とは、ユダ族出身のダビデ王を継いだソロモン王が紀元前 10 世紀に建設した第一神殿（紀元前 586 年に新バビロニアによって破壊された）と、バビロン捕囚後にエルサレムに帰還したユダヤ人が再建した第二神殿のことであり、現在のハラム・シャリーフ／神殿の丘にあったと言われる。第二神殿は、紀元後 70 年にローマ帝国によって破壊された。「嘆きの壁」は、神殿の丘の西壁の一部分を指す。19 世紀後半には、パレスチナのユダヤ・コミュニティとディアスポラ・ユダヤ人双方にとって「嘆きの壁」は重要なシンボルとなっていたが、それは完全に宗教的な意味においてであった。20 世紀初頭、「嘆きの壁」は宗教的シンボルから紛争の中心的イシュー

となり、正統派ユダヤ教徒にとっても世俗的シオニストにとっても、シンボルとなっていった。「嘆きの壁」は、より「中立的」な「西の壁」と呼称を替えられ、ハラム・シャリーフ／神殿の丘の西壁すべてを指すことになった。「西の壁」は、現代イスラエル国家とディアスポラ・ユダヤ人の結びつきを強化し、イスラエル国内の様々なユダヤ人コミュニティ（宗教的・世俗的なユダヤ人、多様なエスニシティ）を統合する機能を果たすようになった。1967年にエルサレム旧市街を占領したことにより、イスラエルは、シオニストの歴史解釈を現実に表現するような形で旧市街の一定の部分を再構築することが可能となった。著者は、再構築の過程で「遺産」をナショナリズムに結びつけ、イデオロギーを建設に結びつけることよって、ユダヤ地区はシオニズムの言説の中で描かれる土地への「歴史的権利」や「ユダヤの民」の概念を現実に示すシンボルとなったと主張している。

第2章「ユダヤ地区の創造」では、ユダヤ地区再構築計画を実行可能にした諸条件を議論している。ユダヤ地区再構築は、計画をリードしたアシュケナジー（ヨーロッパから移民したユダヤ人）エリートの意思だけでなく、当時のイスラエルの建築学や考古学との相互作用によって可能となったという著者の指摘は、エリートの政治イデオロギー分析に終始してしまいがちな政治学的研究に新たな視点をもたらすものであり、大変興味深い。

第3章「ユダヤ地区の建設」では、新しいユダヤ地区の建設計画、技術的特徴、経済的・社会的意義を明らかにしたうえで、建設計画や建設過程で定められた諸規則の分析を通して、建築の現場と政治的イデオロギーの結びつきを議論している。本章の議論は、二次資料の建築・政治的文脈での読み直しと、著者自身が行った建築物そのものの分析およびプランニングに関わった人物へのインタビューに基づいている。新しいユダヤ地区は、新しい住民を惹きつけるような近代的な都市環境でありながら、いくつかの復元された古代の建築物と考古学によって発掘された遺跡がエルサレムの「永遠」のユダヤ的アイデンティティとナショナルな重要性を表すような「新しくて古い」地区となり、シオニストの歴史認識と新しい政治的都市景観を具現化した地区となった。しかしながら、著者によれば、特に1977年にリクード党が政権をとって以降、宗教的シオニストと呼ばれる住民が多数、同地区に移住してきた。彼らは、ユダヤ地区の建築環境を、自らのニーズに適用することによって変化させているという。

第4章「ユダヤ地区の建設―ケーススタディ」では、カルド、フルヴァ・シナゴーグ、嘆きの壁プラザという3つの遺産のケーススタディを通して、前章までの議論の検証を行っている。著者によれば、これらの3つの場所は、ユダヤ地区再構築計画の経済的・宗教的・民族‐宗教的な様々な側面を表している。嘆きの壁プラザは1967年6月のマグリブ地区破壊の跡に造られたものであり、カルドの「発見」には既存の住居の破壊が伴った。しかし、「遺産」の「発見」や「保護」は、「比較的マイナーで新しい」建物の破壊を正当化し可能にする。「過去」は、ナショナルおよびインターナショナルな同情と承認を引き出すための道具として使われ、元の都市構造は大きな反対もなく消滅させられる、と著者は論じている。

第5章「ユネスコとエルサレム」では、議論をイスラエル内部から国際的文脈に広げ、1967年以降、エルサレム旧市街とイスラエルのユダヤ地区再構築計画にユネスコがどのように関わってきたかを論じている。まず、ユネスコの歴代エルサレム代表者のレポートの丁寧な読み直し作業を通して、エルサレム旧市街を保護する使命を負うユネスコとイスラエルとの関係の変遷を明らかにしている。そのうえで、1967年以降にエルサレム旧市街に造られたユダヤ地区は、科学的・考古学的事業や都市復元の建築学的計画を装ったエスノナショナリスト（ここでは世俗的シオニストを意味する）の政策の結果であると述べている。そして、技術的な復元や都市計画を政治的・イデオロ

ギー的計画が凌駕したことによって今日のユダヤ地区が作り出され、同地区は、エルサレムの伝統的な都市環境と国際社会で描かれている遺産保護の近代的な基準のどちらも尊重しない、まったく新しい都市環境と特性を持っていると結論付けている。

第6章「イスラエルとパレスチナにおける都市復元とイデオロギー—比較アプローチ」では、イスラエルによるエルサレム旧市街ユダヤ地区へのアプローチと他の主要なアラブの遺産へのアプローチ、他の中東諸国における都市復元プロジェクト、パレスチナ自治政府による遺産管理のあり方を比較することを通して、エルサレムのユダヤ地区再構築の特異な性格や複雑さを明らかにしている。比較を通して明らかにされた共通点は、過去と現在の都市のあり方に対する我々の認識の形成において、政治的イデオロギーが非常に重要な役割を果たしていることである。遺産は「構築」されるものであり、それゆえに幅広い選択肢の中から遺産は選択される。エルサレムの状況を特殊にしているのは、旧市街という同じ物理的空間の中に、異なる歴史解釈とその遺産との結びつけが相争いながら存在していることであるという。

結論では、新しいユダヤ地区再構築の目的が再度確認されている。ひとつは、多くのユダヤ人を住まわせること、もうひとつはユダヤ地区を「ナショナルおよびスピリチュアルな象徴の中心」とすることであった。著者によれば、ふたつめの目的は、イスラエル社会がナショナル（世俗的）なレベルとスピリチュアル（宗教的）なレベルに分化することによって失敗に終わった。しかしながら、ユダヤ地区再構築計画によって行われたエルサレムの歴史の読み直しは、現在も他のナラティブを許さないほどの強烈なインパクトを持ち続けている。破壊されたマグリブ地区や1948年以前のユダヤ地区の記憶が薄れていく一方で、再構築されたユダヤ地区が物理的にそこにあるという事実は、エルサレムの歴史の唯一の解釈を課し、イスラエル社会や国際社会だけでなく、新しい世代のパレスチナ人住民までもが、それを受け入れるようになっているという。最後に著者は、共通の歴史解釈を獲得することができたとき初めて、エルサレムとその住民にとって平和的な将来をデザインすることが可能となるであろうと述べている。

＊

人は誰でも、「古都」と言われる町を訪れるとき、そこに復元されている古い街区があれば、それは歴史を忠実に再現して見せようとするものだと考える。考古学は古代の史的事実を再構成する学問であると考える。しかし、今日のエルサレム旧市街で我々が目にするのは、それとは全く性質を異にするものなのである。そのことを、本書は以上のような内容によって、余すことなく活写している。

エルサレム旧市街のユダヤ地区再構築は、パレスチナ人の土地を接収して大量のユダヤ人を住まわせるという「ハウジング・プロジェクト」でありながら、住居の構造・材質や遺産の見せ方を工夫することによって「古代から現在までの絶え間ないユダヤ人とエルサレムとの結びつき」というナラティブを物理的に表現し、対内的には多様なエスニシティ、世俗的シオニストから宗教的シオニストまでを統合するナショナルなシンボルとして、対外的にはエルサレム旧市街におけるイスラエル支配の正統性の根拠として機能することが目指された。つまり、人口と土地の支配だけでは正統性は得られず、考古学が古代イスラエルの遺産を見つけるだけでも正統性は得られない。ユダヤ人の住居や遺産がどのように見せられるかが重要であり、その見せ方は建築学や都市計画の単なる技術的なものではなく、多分に政治的・イデオロギー的なものであるということを、エルサレム旧市街のユダヤ地区再構築の過程を詳細に描くことによって明らかにしたことが、本書の最大の功績である。それぞれの建築物や遺産が特定の見せ方によって特定のナラティブの中に位置づけられ

ることが必要であり、またこの見せ方が歴史の特定のナラティブを具現化する。そして、エルサレムのユダヤ化が町の「ユダヤ性」を強調する特定の歴史解釈を具現化するものだということは、1948年以前のエルサレムにおける「共存の歴史」を抹消するものだということである。

将来の最終的地位交渉を見据えてイスラエルは既成事実作りを行っているという指摘があるが（例えば、［Hodgkins 1996; 1998］）、入植地を建設するだけでは支配の正統性は獲得できない。ヨルダン川西岸地区の入植地が現在に至っても「入植地」であり違法なものとして認識されていること、東エルサレムの入植地に関してユダヤ系イスラエル人の間でさえも「入植地（settlement）か近隣地区（neighborhood）か」という議論があること、その一方で、2000年のキャンプ・デーヴィッド和平交渉でエルサレム分割が話し合われた際に、旧市街のユダヤ地区がほぼ自動的にイスラエル主権下とされたように、旧市街のユダヤ地区がもはや異物ではなく「自然なもの」となっているという事実を考慮すれば、本書の議論はますます説得力を持っている。

最後に、本書の意義を踏まえて、今後のエルサレム研究の課題を３つ挙げたい。１つ目の課題は、シオニズムのスペクトラムの中でのダイナミズムと旧市街ユダヤ地区を含む東エルサレムの入植地の発展との関係である。著者は結論で、イスラエル社会がナショナルなレベルとスピリチュアルなレベルに分化したために、エルサレム旧市街のユダヤ地区は多様なユダヤ人社会を統合するシンボルとして機能することに失敗したと述べている。ユダヤ地区の住民は、世俗的シオニストから宗教的シオニストへとシフトしている。一方で、東エルサレムの入植地建設は、地政学的に戦略的な配置がなされ、ハウジング・プロジェクトとしてより多くのユダヤ人を惹きつけるための工夫がなされたことが既存の研究で明らかにされている（例えば、［Dumper 1997; Hodgkins 1996; 1998］）。これらのすべての入植地を「入植地」として一枚岩的に語るのではなく、それらの建設計画と実施過程を詳細に検証し、そこに反映されている政治的目的やイデオロギーをイスラエル社会のダイナミズムと関連付けながら議論する必要があるだろう。

２つ目の課題は、1948年から1967年までの東エルサレムの都市構造と1967年戦争がもたらした影響の詳細な記述である。ユダヤ地区再構築が特定のナラティブを具現化するものであり、その自然化が成功したのであれば、当然、新しいユダヤ地区の存在によって抹消されてしまうものがある。例えば、マグリブ地区の破壊や多くのパレスチナ人の住居の没収である。旧市街の外の入植地もパレスチナ人の土地を接収して建設されたものであり、エルサレムの都市構造を劇的に変えるものであった。したがって、1967年の占領以前の東エルサレムの都市構造を書き記す作業は、1948年のナクバを書き記す作業と同様に重要な課題であろう。

３つ目の課題は、エルサレムにおける主権や支配の正統性をめぐるポリティクスをより立体的に描くことである。本書で示された土地と人口と町のイメージという各々の要素に関わるイスラエルの占領政策を、東エルサレム全体へと視野を広げて検証する必要がある。また、主権と支配の正統性が土地と人口と町のイメージによって獲得されるのであるならば、パレスチナ側はそれぞれの要素に関連してどのような抵抗を行っているのかを明らかにすることも今後の課題である。例えば、エルサレム旧市街では、ムスリム地区にもユダヤ化が及んでいる。ムスリム地区の多くのパレスチナ人商店主がアル＝アクサー・モスクと岩のドームの写真を使った看板を掲げており、これは進行するユダヤ化に対して旧市街の「アラブ・イスラーム的性格」を示すための抵抗のひとつのあり方である［飛奈　2008］。このように、イスラエルによるユダヤ化政策だけでなく、パレスチナ人が日常生活の中で行う抵抗の様々なあり方を明らかにする必要があるだろう。

参考文献

飛奈裕美　2008 刊行予定(印刷中). 「エルサレム旧市街のパレスチナ社会における占領下の諸問題と抵抗―商店街の事例から」『アジア・アフリカ地域研究』7-2.

Abu El-Haj, N. 2001. *Facts on the Ground: Archaeological Practice and Territorial Self-Fashioning in Israeli Society*. Chicago, London: The University of Chicago Press.

Armstrong, K. 1996. *Jerusalem: One City, Three Faiths*. New York: Alfred A. Knopf.

Dumper, M. 1997. *The Politics of Jerusalem Since 1967*. New York: Columbia University Press.

———. 2002. *The Politics of Sacred Space: The Old City of Jerusalem in the Middle East Conflict*. Boulder, London: Lynne Rienner Publishers.

Hodgkins, A.B. 1996. *The Judaization of Jerusalem: Israeli Policies Since 1967*. Jerusalem: Palestinian Academic Society for the Study of International Affairs (PASSIA).

———. 1998. *Israeli Settlement Policy in Jerusalem: Facts on the Ground*. Jerusalem: PASSIA.

Palestinian Academic Society for the Study of International Affairs (PASSIA). 2002. *The Palestine Question in Maps 1878-2002*. Jerusalem: PASSIA.

（飛奈　裕美　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、日本学術振興会特別研究員）

Abdulkader Thomas ed. 2006. *Interest in Islamic Economics: Understanding 'riba'*. Abingdon: Routledge. vi+146pp.

イスラーム経済の特徴を考えたときに、真っ先に挙げられるのがリバーの禁止である。リバーの禁止については、「アッラーは、商売を許し、リバーを禁じておられる」（雌牛章第 275 節）という章句に代表されるように、クルアーンにおいても多く言及されている。しかし、クルアーンでは人々のどのような経済活動がリバー概念に抵触し禁じられるのかについて具体的に明示されなかったため、後世のイスラーム法学ではリバー概念の定義や具体的規定をめぐって活発な議論が行われた。そして、近代以降には、イスラーム世界にもたらされた資本主義的な金融システムにおける利子との関係性の文脈において、「利子＝リバー」と言えるのかいう問題を含めて、再度活発な議論がなされるようになった。そして、1970 年代以降の現代イスラーム金融の実践、特にいわゆるイスラーム銀行の勃興によって、リバー概念はその経済的含意をめぐって世界的にも注目を集めるようになった。このようにリバー概念については、概念の定義、社会経済的含意、あるいはイスラームの教義における位置づけなどをめぐって長い間にわたって多様な議論が行われてきた。ラウトリッジ・イスラーム研究シリーズの 1 冊として刊行された本書では、そのような豊穣な議論を背景に、複数の専門家による論文を通して、言語学、思想、法学、経済学など様々な学問的立場から総合的な考察が加えられている。

内容の紹介に入る前に、本書のタイトルについて少々注釈を加えておきたい。本書のタイトルに含まれる Islamic Economics には大きく 2 つの意味がある。1 つは、20 世紀半ばから台頭してきたイスラーム的に望ましい経済システム、特にその実践形である現代イスラーム金融システムを現代